おかしい
坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかしい

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

誰かがおかしいと言い出した。それはすぐにクラス中に広まっていきやがては。群集心理を扱ってみました。

1部分：第一章

第一章

おかしい

誰かが言い出した。その誰かはもうわからない。

「何かおかしくないか？」

全てのはじまりはこの言葉だった。

「おかしい!？」

「このクラスおかしいだろ」

誰が言ったのかは本当にわからない。しかしこうした言葉が出たのは事実だった。

「おかしいって絶対」

「どうおかしいんだ？」

「口では言えないさ」

しかし返答はこうだった。

「それでも。何かおかしいんだ」

「おかしいか」

「おかしい、絶対におかしい」

普通にこう言われた。やがてそれは全員に広がり誰もが何かおかしいと感じるようになった。しかし何処がどうおかしいかという誰にもわからなかったのだ。

「何が完全におかしいんだ」

「そうだよな。このクラスおかしいって」

「変だよ、絶対」

皆集まれば顔を顰めさせてこう話す。しかしそれでもやはり何かおかしいのかわからない。どうしてもそれがわからないでいたのだ。

「何かいるし」

「そうそう、何かいるよ」

「こうも言われる。」

「変なのがいるよ」

「先生気付かないのかな」

やがてそれは担任への不信につながっていった。

「気付いていないんじゃないの？」

「先生鈍いから」

また誰かが不意にこう言ってそれが定着した。

「先生全然わかってないって、クラスのこと」

「全然見ていないから」

すぐにこういうことになってしまった。

「こんなにかわしいのにな」

「わかるのは僕達だけだね」

「そう、僕達だけ」

やはり自然にこういうことになったのだった。

「わかっていないよ、何もかも」

「校長先生もお父さんもお母さんもね」

「わかっているのは僕達だけなんだ」

完全にそういうことになってしまった。こうなるともうクラスは完全に彼等だけの世界になってしまった。もう担任も何もできなくなっていた。

「おかしいのよ」

これはその担任の先生もわかっていた。職員室で同僚に対して話

していた。

「最近私のクラスが」

「おかしいの？」

「ええ。确实におかしいわ」

その中性的なボーイッシュと言っていい顔を曇らせて述べる。

「皆が皆おかしいって言って私を遠ざけるようになって」

「おかしいっていうと」

「それがどうおかしいのかわからないのよ。見たところ何もおかし
なところはないわ」

先生から見ればそうなのだった。

「何もね。ただ」

「生徒達だけがおかしい」

「そういうこと。完全に何が何かわからないわ」

たまりかねたような言葉だった。

「おかしいのはそれ。生徒達が生徒達で固まっています」

「どう見ても何かありますね」

「ええ。けれどそれが何かわからない」

同僚の言葉に対して応える。

「だから私も何をどうしていいのかわからないのよ」

「何なんでしょうか」

「少しよく見てみるわ」

先生は今は様子見に徹することにしたのだった。

「下手に動けばまずいわ」

「そうですか」

「ええ。だから」

そしてまた言う。

「今は動かないわ。今はね」

先生はこうすることにした。だがその間にもクラスはさらに閉鎖的で奇怪なものになっていき。彼等は彼等だけで固まりやがて他のクラスや学年とも交わることもなくなっていた。

2部分：第二章

第二章

「あのクラスおかしかねえか？」

「そうだよな。何であいつ等だけで動くんだ？」

隣のクラスでもこのことに気付いた。それであれこれと話すのだった。

「まるであいつ等だけで世界があるみたいにな」

「だよな。完全にあいつ等だけの世界だ」

こう見ているのだった。

「それっておかしいだろ。何があるんだ？」

「あのクラスに何かあるのか？ひょっとして」

「連中にとってみればそうなんじゃないのか？」

彼等にしてもその閉鎖的な状況がわからずに言うのだった。

「それであんなに固まってるんだろ」

「そうか。それでも」

「何だ？」

「気持ち悪いものがあるな」

それを感じるものがあったのだった。

「あのクラス。そう思わないか」

「ああ、確かにそれはあるな」

他から見ればそうなのだった。

「明らかにおかしいよな」

「閉鎖的だしな」

「こっちには絶対話し掛けないしな」

「そうそう」

こう話していくのだった。

「完全にあの連中だけで固まってな」

「部活でもそうなんだよ。出ることは出るけれど絶対話なんかしないぞ」

「それっておかしいどころじゃないだろ」

流石にこれには懐疑的な言葉が出た。

「部活でそれは」

「それで実際にそうなんだよ」

「異様だな」

外から見ればまさにその通りだった。

「おかしいなんてものじゃないな」

「異常だろ。あちの方がおかしいぜ」

「そもそもだよ」

「ああ」

彼等の分析は続く。

「あいつ等何がおかしいっていうんだ？」

「さあな」

それは誰にもわからないのだった。外から見ればだ。だからよけいに異様に思えたのである。そのことを言い合い首を傾げ合っていた。

「けれど。あのままいったら余計におかしくなるだろ」

「余計にか」

「どうなるんだろうな、本当に」

「少なくともあれだろ」

外から見ての言葉がまた出た。

「連中は自分達以外には見えなくなっているからな」

「あのまま行くところまでってやつか」

「そうじゃないのか？」

「こう予想されたのだった。」

「あのままな」

「大変なことにならないといいがな」

「そう思うんだがな。どうなるかな」

外からは不安視されていっていた。そしてそれがやがて。現実のものになろうとしていた。

彼等はさらに閉鎖的になり遂には。中でも何かを探すようになっていた。その探すものとは。

「絶対にいる筈だ」

「そうだ、いる筈だ」

「こう言い出したのである。」

「中にこそいる」

「おかしなのが」

内部において異分子を探しだしたのだ。ごく自然に。

「探せ」

「探せ」

集まればまるで夢遊病者の様に言い合っていた。

「何処かにいる」

「誰かがそうだ」

そうしておかしな者を探していった。そして遂に一人それが見つかったとされた。それは何処にでもいるごく普通の生徒だった。

彼等の中にいるだけの。

「あいつだ」

「あいつだ」

彼等は彼を指差して言う。

「あいつがおかしい」

「あいつしかいない」

やはり夢遊病者の顔で言うのだった。

「あいつが全て悪い」

「あいつがおかしいんだ」

何を根拠にするでもなくこう言って動き遂には。彼を捕らえ教室でリンチをはじめたのだった。

「おかしな奴を消せ」

「この世からいなくなれ」

リンチは最初数人がはじめたがやがてそれは一人増え二人増え遂にはクラス全員のものとなった。そのリンチに隣のクラスの担任が気付いた時には最早大変なことになっていた。

「離せ！」

「御前等は関係ない！」

彼等は取り押さえられても虚ろな目で叫ぶのだった。

「おかしな奴がいる」

「おかしな奴を消すんだ」

こう言ってまだ動こうとするのだ。そしてリンチを続けようとする。

「消せ」

「粛清だ」

遂にはこうした言葉まで出て来た。

「世界を乱す者は消せ」

「粛清だ」

「抹殺しろ」

こう口々に言ってまだ動こうとした。しかしそれは何とか数を使って押さえリンチは止められた。犠牲になった少年は重傷を負っていた。それが終わってからこのクラスは一時休校となり分析が行われたのだった。それにより恐ろしいことが判明したのだった。

「群集心理ですか」

「それとですな」

この学校の職員室においてだった。このクラスの担任達も含めた話し合いが持たれそこでその分析結果が話されていたのである。

「閉鎖的な社会独特の行動が出ました」

「閉鎖的な社会の」

「そうです」

述べていたのは教頭であった。彼は校長の横で強張った顔で述べていた。

3部分：第三章

第三章

「閉鎖的な社会、そう」

彼は言葉を続けた。

「全体主義国家がありますね。カルト教団もそうですが」

「ああした異様な社会ですか」

「そう、そうした異様な社会においてです」

彼は述べていく。

「こうしたことが起こります。同じ様な人間が集まっていると自然に異分子を探すようになるのです」

「異分子を」

「実際のところ異分子かどうかはどうでもいいのです」

こう言うのだった。強張った顔と声で。

「異分子でなくともそれが異分子となります」

「群集心理がそれを助長するのですね」

「そうです。誰かが異分子だと言えば」

「それだけで異分子になると」

「その通りです。実際に異分子かどうかはどうでもいいのです」

「どうでもですか」

どの教師達も暗鬱な顔でその話を聞いていた。聞くだけで何か恐ろしいものを味わっていた。そしてそれから逃れられなかった。

「そう、どうでもです。重要なのは敵がいることなのです」

「敵が」

「簡単に言うとは組織を守る為の敵です」

そう言われた。

「組織を守り維持する為には敵が必要です」

「閉鎖的な社会においてはですね」

「より閉鎖的であればある程」

「まさにカルトですね」

「しかし何故」

ここで教師の一人から疑問の言葉が出て来た。

「何か」

「何故こんなことになったのでしょうか」

はじまりからして奇妙だった。それに関して言及されるのも当然の流れであった。

「どうしてまた。こんなことに」

「それについてはです」

「はい」

教頭はそれについても話す。教師達はそれも聞くのだった。

「どうやらはじまりは些細なものです」

「些細なものですか」

「はい、誰かが言ったのです」

「誰か!？」

「誰かまではわかりません。そしてそれは重要ではないのです」

奇妙な言葉だった。はじまりが誰かはどうでもいいというのだから。しかしそれでも彼は話すのであった。その強張り暗鬱なものになった顔で。

「重要なのはこうしたことがはじまりになったということです。そしてそれは」

「それは」

「おかしいという言葉が出たことです」

「おかしい!？」

「そうです、おかしいです」

この言葉を繰り返して述べた。

「その言葉が全てのはじまりでした」

「はじまりはそれか」

「誰が言ったのか。やはりそれは」

「わからない、というわけか」

「はい、おそらくは誰かがふと言った言葉です」

こう述べられる。

「それが全てのはじまりで」

「馬鹿な、そんなことでこんなことになるなんて」

「有り得ない、異常だ」

そこにいる者全てが有り得ないと言った。彼等にとってはおよそ考えられないことである。というよりは狐につままれたようにしか聞こえないのが実情であった。

「そもそも何がおかしい」

「それすらもわからない」

「そう、わかっています」

それははっきりと述べられたのだった。

「誰が言ったのかも何がおかしいのかも」

「わからないのですか」

「最早何が何なのか」

「ですが起こったことは事実です」

しかしこの言葉だけは真実だった。隠しようもない事実だ。

「粛清にまで至ったということは」

「全ては些細なことから至ったと」

「今回の話は」

「はい」

それがあらためて認識される。否定できない事実が。

「しかも何が何なのかわからないまま」

「至ったと」

「そういうことです。全ては」

最後まで話されるがそれでも原因はわからないのだった。わかっているのは事実だけだった。はじめりも経緯もわからない。だが事実は事実なのだった。不気味な事実だけが残ったのだった。

おかしい 完

2008・6・21

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~1613

おかしい

2012年11月24日 02時21分発行